

民主現・逢坂誠二

vs 事実上の一騎打ち

自民新・前田一男

激突！ 大勝負

大接戦の可能性

当落攻防13万票前後

自民党道8区支部長に前田一男氏（45歳）が一気にトントントンと決まり、次期衆院選道8区の自民党候補として本格始動した。保守一本化の方向が定まってきて、函館・道南の自民・保守陣営念願の「本場の戦い」（経済界幹部）がスタートを切った。対する相手は民主党現職の逢坂誠二氏（52歳）。共産党が新人として古岡友弥氏（35歳、党道8区政策委員長）を擁立することになったが、事実上は民主現・逢坂誠二対自民新・前田一男の一騎打ちといつてよい。

道内小選挙区有数の大激戦区になること必至で、09年総選挙による政権交代の後から今日に至る政治状況の有様によって、戦いの構図は「守りの逢坂」対「攻めの前田」になりそうだ。攻防、当落の分岐点は12〜13万票とみられ、今後の展開に目が離せない。

3月16日、函館市内のホテルで前田一男氏の連合後援会始動の会合（準備会）があつたが、何かしら明るさがあつた。取材を通して、自民・保守陣営の選挙関係でこのような明るい感じの雰囲気は小選挙区制が導入されて初めてのような気がする。

佐藤孝行氏（故）・佐藤健治氏親子の選挙、2回の保守分裂選挙を含めて、自民・保守の選挙の雰囲気は何かしら暗かった。その理由は何か。長く長く続いてきた佐藤派だ、旧阿部派だいう相容れない対立感情が底流にあり、「どうせ勝てない。負けるだろう」ということがあつたからにはかならない。

まだ断定するには早計だが、今度は09年からとっておきできた前田一男氏の擁立を保守一本化の方向で決定し、民主党・連合陣営を相手に「本当の勝負ができる」との意識が出てきている。

■ ■ ■
ズバリ、本題に入ろう。

いつ解散・総選挙になるかもよるが、次期の道8区は大激戦になりそうだ。道内小選挙区有数のおもしろい選挙、きびしい選挙、大激戦必至だ。

すでに広く承知のように、前回の09年8月の総選挙道8区では道比例(1期)から移入され、初めての小選挙区、道8区から出馬した逢坂誠二氏が道南入りしてからいつかいつかの解散のすえ、「自民党はもうダメだ」という政権交代の大合唱の中で17万票余の空前の得票をした。道南入りして1年9カ月間も選挙運動をやりまくり、自民・保守が佐藤健治氏のむちゃくちゃな無所属出馬で分裂選挙になったことも逢坂氏断然有利に働いた。

自民が土壇場で招いた落下傘

前田氏／保守一本化を本物にすべく、まず自民・保守支持票をきっちりまとめる上げられるかどうか、その上でー。逢坂氏／前回の17万票はもうない。「守り」の正念場の戦い



候補の元農水省官僚の福島啓史郎氏5万8千票、佐藤健治氏はわずかに4万票で大敗北し、挙げ句の果て買収の選挙違反で逮捕・起訴・有罪、公民権停止で函館を去った。2人合わせて9万8千票、訳のわからぬ「幸福の科学」とやらの泡沫候補の4千票を加えても10万2千票で、逢坂氏が圧勝した。

逢坂氏の圧倒的な17万票は、道8区の有権者各層・各党支持層が多く流れ込んだもので、投票・開票の当日、道新が行った調査報道によれば、「支持政党別で民主党の支持層の94%が投票したほか、無党派層の75%、共産党支持層の72%が逢坂氏に投票したと答えた」。さらに、「自民党支持層の31%、公明党の15%が逢坂氏に投票したと答えた」と報じた。

あれから2年7カ月、政権交代をさせた民主党政権の有様はマニフェスト瓦解を持って混乱、3・11大震災でさらなる迷走を重ね、今さらにマニフェストに消費税の「消」の字もなかった消費税増税に熱を上げ、賛否を二分する騒ぎを起し、政局ま



民主現・逢坂誠二氏

すまず混乱している。

民主党政権はすでに3人目の首相という体たらくで、支持率は著しく低下し、世論調査10%台にある。民主党を見る有権者の目は非常にきびしい。

ただ、野党第1党の自民党も支持率低迷にあえいでいる状況が続いている。

これらのことから、逢坂氏の前回の17万票はもうあり得ない。今回、自民・保守が前田氏に一本化されることで、前回約3割も流れた自民党支持層の再流れ込みはほとんどなく、共産党が古岡氏を擁立することで、

前回の同党支持層の逢坂氏投票72%も大幅に減少する。今後の展開によるが、無党派層の前回の75%も落ち込むこと間違いなし。

そこで、今度の逢坂氏対前田氏の事実上の一騎打ちを占うに参考になるとみられるのが05年9月の選挙で、この時は民主・金田氏と自民・佐藤健治氏、加えて共産党の前川一夫氏の3人の戦いであった。

郵政解散大騒ぎの総選挙で、小泉旋風吹き荒れ、自民党が300議席をとった選挙。佐藤健治氏に客観情勢大いに有利で

2009年8月30日実施院選北海道8区

投票率69.34% (前回66.67%)

候補者名	逢坂 誠二 〈民主党前〉	福島啓史郎 〈自民党新〉	佐藤 健治 〈無所属新〉	西野 晃 〈諸派新〉
道8区合計	171,114	58,046	40,090	4,075
	当 選			
函館市	100,706	32,276	21,897	2,454
北斗市	17,489	4,765	4,460	377
渡島管内	37,070	14,147	9,061	891
桧山管内	15,841	6,858	4,672	353



自民新・前田一男氏

あったが、金田氏に2万票余差をつけられ、復活当選すらできなかった。

しかし、この前々回05年では佐藤健治氏は11万4千票を得票し、かつて父親の佐藤孝行氏が取った11万1千票を上回った。

この11万票が自民・保守支持票の一つの目安と考えられる一方、加えて、03年の総選挙、この時は佐藤健治氏と今回の前田一男氏の2人が出馬、保守分裂になったが、2人合わせて13万票弱を得票したことからして、保守一本化が文字通りきち

んに行われ、まとめられるならば、12万票ほどが自民・保守票と目される。

前回09年の総選挙時の道新の調査による約3割が逢坂氏に流れたということは、05年の佐藤健治氏1人の時の11万4千票（この選挙、旧阿部派をまとめ切っていない）、03年の佐藤、前田両氏出馬の保守分裂の時の2人合計13万票弱、09年の福島、佐藤両氏の保守分裂の時の計2人の10万票弱を総合して勘案するに、なかなかいいところを行っているということになる。

過去全て敗北・5連敗に終止符打つか千載一遇の機会

保守一本化で12万票ほどが堅いということとは、とりもなおさず、民主党と互角の戦いに持ち込めれるということになる。

保守分裂がなく、保守一本化となって、これをきちつとまとめれば12万票近くは堅いと目される。

2005年9月実施 衆院選北海道8区 投票率66.67% (前回61.37%)			
候補者名	金田 誠一 <民主前>	佐藤 健治 <自民新>	前川 一夫 <共産新>
第8区合計	134,963 (前回106,709)	114,141 (前回74,482)	21,891 (前回・ 伏木田15,980)
	当選		
函館市 (前回/渡島東部 旧4町村加算)	79,525 (63,878)	62,172 (36,487)	13,414 (10,031)
渡島管内 一函館市除く (前回/渡島東部 旧4町村除く)	41,699 (31,472)	37,023 (23,718)	6,183 (4,180)
桧山管内	13,739 (11,359)	14,946 (14,277)	2,294 (1,769)

まだまだ早いですが、当然投票率によるもの予想するに道8区の投票（得票）総数は大体27万票と考えられる。前回の

09年8月は投票率69・34%で約27万3千票、その前の05年9月は投票率66・67%で約27万1千票であった。



逢坂誠二衆院議員の会合・パーティー（写真は函館での新春の集い）には支援・支持者がよく集まるが、次期総選挙は正念場の戦いになる。

09年、05年ともに投票率が違うのに同じくらいの投票総数であったわけだが、これは人口減少によるもの。09年に投票率がその前に比べ2・67%増となったが人口減による有権者の減少で、ほぼ同じ約27万票になった。

次期総選挙は人口減でまた落ち込むだろうが、まあ27万票とみていいだろう。

そこで、大体で予想すると、共産党がよくて2万票くらい、1万5〜6千票くらいとみるのが妥当な線であって、この共産党獲得票を差し引く残りは25万4〜5千票となり、当落の攻防ラインは12万5千票とか、13万前後になってくる。

自民・保守は今回、前田一男氏に一本化となった。今後これをガツチリしたものを持って行くかどうかにかかってくるが、前述のように、まとめれば前田氏はまず12万票ほど得票できるし、民主党に対するきびしい批判からくる追い風をもってすれば、戦い方次第で上乗せが十分可能で、またそうしなければ当選できない。

つまりは民主現の逢坂氏に対して、やり方次第で十分に互角の戦いに持ち込めるということであり、今回はまたとないチャンス到来で、大勝負の選挙戦だ。

小選挙区制の道8区となつて全て敗北の過去5連敗にピリオドを打ち、地元自民・保守悲願ともいふべき議席獲得も夢ではない。大勝負、互角―大接戦に持ち込んで勝利し、渡島・檜山の道南に保守国会議員の旗を立てる。前田氏語る「千載一遇のチャンス」という認識は当を得ているといつていい。

その前提として、前田氏の選挙はまずはとにかくにも、保守一本化で保守支持層をきっちりまとめ上げられるようにかかっている。

他方、民主・逢坂氏にとつては、前回の17万票など過去のものとし、民主党批判のきびしい情勢の中で、「守りの選挙」から「攻めの戦い」に転じることができるとどうか。

「何がなんでも、どんな逆風が吹こうとも」と総力を挙げる方針があり、まさに真価が問われる選挙となる。